

[研究ノート]

クリーンで公正な選挙への長い道のり  
—Bersih によるワークショップから—

伊賀 司<sup>1</sup>

マレーシア政界では去年から総選挙の時期が話題にのぼることが多くなった。マレーシア下院の任期は5年で前回は2004年に総選挙が行われたために、任期どおりいけば2009年まで総選挙は行われなくなる。だが、2006年9月末にUMNOが党役員人事を総選挙が終了するまで行わないことを発表すると、解散総選挙が近いのではないかという観測が俄かに現れ始めた。時期については現段階で様々な説が唱えられているものの、最終的には首相の決断次第である。ただ、来るべき選挙を見据えて与野党が準備を本格化しつつある一方で、政党以外にも次回の総選挙に注目しながら活動を活発化させている団体も存在する。そうした団体のうち本稿では、NGOのBersih<sup>2</sup>の活動について筆者が参加したワークショップを中心に紹介するとともに、マレーシアの選挙の問題点について見ていきたい。

ジャーナリストとブロガーのための選挙報道に関するワークショップ

筆者は7月15日に行われたBersihによる「ジャーナリストとブロガーのための選挙報道に関するワークショップ(Workshop on Election Reporting for Journalists and Bloggers)」に参加した。Bersihはクリーンで公正な選挙を実現するためにNGOや野党が中心となって2006年11月に結成された<sup>3</sup>。その活動は選挙管理委員会(Election Committee)への提言や市民への啓蒙活動からなる。

筆者が参加したワークショップでは、*Malay Mail*, *The Sun*, 『星洲日報』、『東方日報』などの主要紙を含めたジャーナリストと近年話題になりつつあるブロガーを迎え、午前中はマレーシアの選挙の現状を3人の論者が解説し<sup>4</sup>、午後はグル

<sup>1</sup> 神戸大学大学院博士課程在籍。

<sup>2</sup> BersihはGabungan Pilihanraya Bersih dan Adil (Coalition for Clean and Fair Election)の略である。

<sup>3</sup> 2006年11月23日の結成時には、団体は5野党と25のNGOが参加したが、現在では野党を含め64の団体がBersihに参加している。

<sup>4</sup> 3人の報告者はLiew Chin Tong (Executive Director, Research For Social Advancement), Mustafa K. Anuar (Associate Professor, USM), Wong Chin Huat (Research Fellow, IKMAS, UKM)の3名であった。

ープに分かれて特定のテーマについて集団討論するというものだった。

以下、本稿では、特に午前中の報告を中心に重要と思われる点を取りあげる。

### 選挙人名簿の登録・作成と投票のプロセス

一番議論が集中したのが選挙人名簿の登録・作成と実際の投票のプロセスである。マレーシアでは 21 歳になって新たに投票権を得た人や、投票する選挙区を変更した人が投票権を得るためには、自分で選挙人名簿への登録を行わなければならない。この名簿に沿って投票は行われるが、問題が噴出するのがこの選挙人名簿の登録・作成と投票のプロセスである。以下、ワークショップで紹介された具体的な問題をみてみよう。

- ・サバでは約 5 万人の有権者が偽のアイデンティティ・カードを使って登録した外国人である疑いがもたれている。

- ・合計で 18 万人もの故人が最近 (Bernama 07/01/04) に至るまで選挙人名簿に登録されていた。

- ・2004 年の総選挙ではスランゴール州だけで 22 万 3950 人の投票者 (州の有権者の 15.7%) が投票所を見つけることができなかった。有権者は、実際に存在しない投票所を割り当てられている。

- ・選挙監視団体の MAFREL によれば、2004 年以前に確認のためサンプルで抜き出されたゴンバックとルンバ・パンタイの有権者のそれぞれ 50% と 73% が身元が確認できないか、追跡不可能な住所で登録がされていた。

これらの具体的事例は多重投票者、幽霊投票者(phantom voter)や行方不明投票者(missing voter)の存在を示唆するものである<sup>5</sup>。さらに、郵便投票の問題も指摘されている。郵便投票は開票の際の透明性が問題視されているが、問題はそれに留まらない。郵便投票は軍人や選挙当日に仕事を割り当てられた警官、選挙職員などが利用することになっているが、軍人や警官については秘密投票が行われず、上司から特定の政党に投票するように圧力を受けているともいわれる。

### 選挙報道

選挙報道については、筆者自身の個人的体験もここで披露したい。筆者は 2005 年 12 月にクランタン州のブンカラン・パシールで行われた補選を現地で見聞した。その際、選挙区の中心であったパシル・マスの町で報道拠点を回ったり、ジャーナリストについて選挙の様子を見た。その際に印象的だったのは、各党の旗で埋

---

<sup>5</sup> 一般に幽霊投票者とは死去や罪を犯して選挙権が停止されているにも拘わらず、選挙人名簿に登録されている有権者であり、行方不明投票者とは選挙登録をしたはずなのに名簿に名前がない有権者のことである。

め尽くされた町並みとともに、報道拠点であった。英字紙・マレー語紙の各紙が共同で置いていた報道拠点は UMNO 青年部の選挙事務所がある建物と一続きになった隣に構えられていた。華字紙の場合はさらに極端で、記者は MCA 支部の中で原稿を書いていた。筆者が訪れた際、MCA 総裁のオン・カティンが幹部と選挙情勢について会議をしている隣の部屋で記者が記事を書き、本社へと送っていたのである。

また、選挙期間中はできるだけ RTM の夕方 6 時と TV3 の夜 8 時のテレビ・ニュースを見るようにしていたが、野党指導者やその活動をテレビでみることは全くなく、テレビに映るのは首相や与党幹部とその選挙活動の状況だけであった。野党について言及されたのは与党幹部による野党批判だけであった。

こうした筆者の個人的経験の他に、選挙報道の偏向でよく知られているのは 1990 年総選挙で当時、野党の Semangat 46 を率いていたトゥンク・ラザレイに対する報道である<sup>6</sup>。90 年の選挙運動の際、カダザン文化を象徴するヘッドギアをかぶったラザレイの写真がメディアに出回ったが、それは、ラザレイがクリスチャンの立場に立ってムスリムを裏切っているというイメージを広めるために利用されたものだった。こうしたメディアを使ったイメージ戦略が 90 年総選挙だけでなく、95 年、99 年、2004 年の選挙においても繰り返されてきたことがワークショップでも指摘された。

### その他の問題

その他にも、クリーンで公正な選挙を実施するうえでの問題は山積みである。例えば、有権者への直接・間接的な方法による現金のばら撒き、選挙期間中に与党側から発表される新たな開発計画、選挙の公示から選挙期間が僅か 1 週間程度しかないことなどは深刻な問題である。

午後のグループ別の集団討論とその討論結果の全体への報告の中で興味深かったのは、州レベル以下の地方自治体選挙の導入についての議論である。導入について政府・与党をあてにできないために、PAS に働きかけてクランタン州で導入を働きかけるという提案がなされた。実際の実現可能性は別にしても、自治体レベルでの選挙がたとえクランタン 1 州であっても実験的に導入されるならば、他州への波及も含めてマレーシアの政治体制全体に大きな影響をもたらす可能性があるだろう。

### Electoral One-Party State? -クリーンで公正な選挙への長い道のり-

上で指摘したようにマレーシアの選挙を取り巻く環境は公正であるとは言いがたい。当日のワークショップの報告者であるウォン・チンファットは制度的に与党に有利な選挙に基づくマレーシアの政治体制を選挙一党制国家(Electoral

---

<sup>6</sup> ラザレイは 95 年選挙の後、Semangat 46 を解党し、UMNO に再合流した。

One-Party State)と呼び、民主主義から逸脱した事例としてマレーシアを捉えている<sup>7</sup>。

このような欠点の多いマレーシアの選挙をクリーンで公正なものにしていくにはどうすればよいのか。Bersih は達成すべき目標を短期と長期に分けて提案している。まず、短期目標として、①投票時の指紋の押印に消えないインクを使用すること<sup>8</sup>、②選挙人名簿を更新・整理しなおすこと、③国内での郵便投票を廃止すること、の3点を挙げている。いずれも多重投票や幽霊投票者などを出さないために最低限必要な取り組みである。長期の目標としては多くの提案があるが、主に①選挙運動資金の改革、②国家・行政機構の中立性、③比例代表制や自治体選挙の導入などを含めた選挙制度改革、などがある。

現段階で Bersih の掲げる短期目標の一部について選挙管理委員会は肯定的な反応を見せている。これは、これまでの Bersih の活動が選挙管理委員会を動かしたものと見えそうである<sup>9</sup>。だが、Bersih の提案もまさしく最初の第一歩が認められただけであり、現状ではマレーシアがクリーンで公正な選挙を達成するにはまだまだ長い道のりであるといわざるを得ない。Bersih の発信する重要なメッセージの中に、選挙制度の不備による敗者は野党でなく、真の敗者は納税者として政府活動を支えている一般市民であるとのメッセージがある。このメッセージをジャーナリストやブロガーらを巻き込みながら、どこまで一般市民にまで広めていけるかが今後の選挙制度改革の成否を握っている。

2007年8月15日 脱稿

---

<sup>7</sup> 選挙一党制国家について詳細は、以下を参照。Wong, Chin Huat and Norani Othman (2007, forthcoming) “Malaysia at 50 – an Electoral One-Party State?” in *Governing Malaysia*, Kuala Lumpur; MSRC. また、選挙が行われているにも関わらず、体制が権威主義的であり、むしろ選挙が権威主義体制に正統性を与えている選挙権威主義(Electoral Authoritarianism)の事例については2002年4月号の *Journal of Democracy* で特集が組まれており、Wong らの選挙一党制国家はこの特集からヒントを得て構想されている。

<sup>8</sup> マレーシアの選挙では不正を防止するために指紋を押印する。投票時には、まず、最初の選挙職員が投票者を確認、次の職員のところ指紋を押印し、最後の職員が投票用紙を渡す手順になっている。Bersih はこの指紋押印の際に、消えるインクが使用されていることが多重投票者や幽霊投票者の温床になっているとしてきた。

<sup>9</sup> 8月14日付けの *Star* の報道では、選挙管理委員会委員長のアブドゥル・ラシッド(Abdul Rashid Abdul Rahman)は、消えないインクをインドから輸入して今回の選挙を行うことを表明した。因みに、アブドゥル・ラシッドはこの消えないインクを導入することを検討している経緯について、次のように答えている。「これは単に一部の集団がこの問題を政治的宣伝として利用したり、(選挙管理)委員会のイメージを傷つけるのをやめさせるための措置である。」V.P. Sujata, “Commission to ink voters in next general election,” *The Star*, 14/8/2007.